

して、話題を集めていました。

しかし、鉾山がほとんどろえると共に、「スミつけ祭り」も姿を消し、いま、鉾山は、舗装道路らしく黒い小石の工メリーの採掘が行なわれています。

鉾山が盛んな頃は、児童数が二百人余りだった木浦小学校も、いまは、一年生三人、二年生六人、三年生六人、四年生六人、五年生七人、六年生九人、計三十九人になっていきます。

ここから八ヶ離れたところに、一、二年生だけの西山分校があります。ここも一年生三人、二年生一人、計四人です。

本校・分校を合せて四十三人という小規模校です。

これも過疎現象の一つのあらわれとってよいでしょう。

(つづく)

採録

前高明神の神踊歌

本五村井ノ上の兩社秋祭奉納

会員 久々宮 永

先達ては態々お立寄り給わりましたので、不意で失礼しました。

当地の秋祭りも、ご贖か通りの寂れようです。再興・復活出来なないものかと思いますが、神踊りの「ハーインヤ」にしても、当部落(井ノ上)で只奉仕する小学生女児が、五十戸の部落中に僅か三名しか居ないそうで、踊り子の数からして、單に一部落で

はどうかならぬことで、淋しい限りであります。神踊りの歌詞については、ずっと以前に故老の口伝を書き残したものがありませんので、それをご紹介しましょう。

四季

ハーインヤ 春は桜 ハレ その下に
ハーインヤ 夏は柳 ハレ その下に
ハーインヤ 秋は紅葉 ハレ その下に
ハーインヤ 冬は霰 ハレ その下に

十七八

イヨシ 十七八 その山 あのつっじ
ハーインヤ ハー 寝入るとすれはわり起こされる
ハー 寝入るとすれはわり起こされる
後世の武蔵野原の一本すすき

ハーインヤ ハー 何時穂に出で乱れあうかな
ハー 何時穂に出で乱れあうかな
夜中のべど逢はんその夜は悔やし
ハー 書きやる文をただいたずらに
ハー 又に見てゆらん人ほうらめしや

塩飽

塩飽船かよ君待つらん
ハレ 風を静めて 名乗る辰 (笛)

我は三原のサビ刀 思い廻せば 拓ほしや
沖のとなかばに茶屋建てて 上り下りの船を待つ
沖のかもめに物問へば 我は立っ鳥 波に問へ
船の上でも女郎は呼ぶ トマを敷寝のかじまくら

ヒンダ

ヒンダの横田の若苗を シヨンボリシヨボリと
植えたもの 植えたもの (續)

小松の葉かげに月見れば 見えつかくれば
また添えつ また添えつ

此方の里にも駒あれど 君を思へば
徒歩で行く 徒歩で行く

兵庫の港は七港 入船出船の
数知れず 数知れず

つるべは九つ身は一つ 澄みたる水にて影見れば
わが身ながらもよい顔じや よい女郎じや

別札

イヨは 別札惜しまぬ人もあらじ ハイーヨーヨー

夜中に ハアハア ハー インヤ

月に村雲 花に嵐 ハイ ヨーヨー

思へども 夕暮の

イヨは 別札惜しまん人もあらじ ハイ ヨーヨー

夜中に ハアハア ハー インヤ

寢屋のふし戸 忍びの殿御 ハイ ヨーヨー

思へども 雑の

イヨは 別札惜しまん人もあらじ ハイ ヨーヨー

夜中に ハアハア ハー インヤ

袖に露忍し 扇に要 ハイ ヨー ヨ

思へ共 暁の

梅は北野

梅は北野の天神さんの御神木 見事に咲いたとき

その梅どうじゆいな

風にもまれてチーラチラ

東風が吹く ソレ 香りをのこせ 梅の花

二人が仲良 二世も三世も変りゆせぬ

(以下裏)

今年や巳の年 ご豊年じや

穂に穂がなりて 米の山

ますりとかきの紋所

風んにそれそれ ご豊年じや (以下裏)

以上のようであります。

「梅は北野」と「ご豊年」は、俗に小踊りと申しま
して、「ハイインヤ」とは別種かものみようです。

歌詞中、意味の通じない部分もありますが、つとめて
原文のままにしました。

「しわく」は、瀬戸内の塩籠と判断して、その字を当
てました。

「ハイインヤ」の由来については詳しくはわかりま
せんが、上方から来た師匠六兵衛の教えたものとされて
います。六兵衛の遺品という、踊りのはいはいに使った鐘
が、井ノ上に現存しています。

(中裏)

今朝は初霜で、しかも大霜のようです。因長山の秋
も、深み行く頃となりました。(下裏)

(編集者日記)

この久々宮氏採録の神踊り歌は、杖踊などと共に秋祭りには奉
祝されるもので、奉仕者は普通小笠原女児、踊扇をもって、ウツク
したテンポの老人の歌声に合わせて、舞うものである。(羽)